

滑稽俳句について

衣川洋子

(第四回滑稽俳句大賞 次点受賞)

俳句は、俳諧の連句の発句が独立したもので、俳諧の「諧」は、「諧謔」の事。

つまり、滑稽俳句はその歴史が古い。又、流派の境もなく詠まれ支持されてきたものと思う。滑稽俳句が高尚を好む俳人から軽んぜられているとしたら、それは川柳に近づきすぎたためではないだろうか。

俳句と川柳の大きな違いは、俳句には「季語」があり、「切れ」があるという事。季語は、時候、天文、地理、生活、行事、動物、植物など多岐にわたるが、その中から一番、句の内容にマッチしたものを選び、季語を生かし働かせる事が大切だと思う。

三月の朝日俳壇に、次のような一句が掲載されていた。

我が猫の恋の相手に落胆す

選者四人のうち、伝統俳句の稲畑汀子氏と現代俳句の金子兜太氏という流派の異なるお二人がお選びになっていた。しかも、万人の共感を得たらしく、翌週の「天声人語」は、次の如くであった。

一先週の朝日俳壇に、顔がほころんだ。稲畑汀子さんの選者評は、「飼

い主の落胆を誘う相手の猫やいかに」と、読者の興味を代弁していた。人の目には不細工でも、猫なりの審美眼があるのだろうか。

天声人語は、この後、ハエと酒の話に転じていくのだが、割愛する。

この句は、「我が猫の」で軽い「切れ」があり、季語もよく効いている。飼い猫を詠んでいるのだが、更に、「我が猫」を「我が息子」「我が娘」と置きかえる連想も働き、人間社会の事のようにも思えて奥行がある。ここが川柳と俳句の違いではないだろうか。

滑稽俳句は、落語にも通じるものがある。それは「言葉を介してのユーモア」である事、噺家の名人といわれる人達は、「芸」があり、「技」が磨かれている。滑稽俳句にも芸が必要で、技を磨かねばならないと思う。更に「ポエジー」が加われば申し分ないのだろう。

滑稽俳句の道は深いと思われるが、そこまでに至らないにしても、滑稽俳句を作ったり、読んだりすることの効用は非常に大であると思う。落語のように人を笑わせ、自分も笑えば、健康増進にもなる。「笑い」は、免疫や脳の活性化、ストレスやアレルギー反応の軽減、血糖値の上昇を抑える等と云われている。

「座の文芸」の俳句にユーモアが加われば、まさに無敵の「極楽の文学」といえよう。